

伊藤整日本文壇史

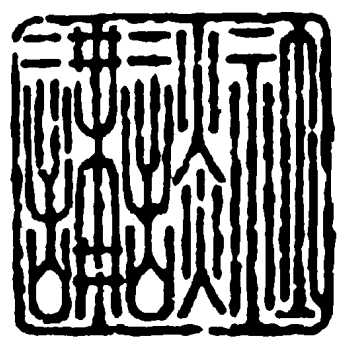


新戦後
新大學

9

講談社

日本文壇史Ⅸ



◎伊藤貞子 一九七一

昭和四十六年二月二十日 第一刷發行
昭和四十八年三月四日 第二刷發行

定價七二〇圓

著者 伊藤 整

發行者 野間 省一
東京都文京區音羽二・二二・二

印刷者 長澤 良一
長野市西和田四七〇

印刷所 信毎書籍印刷株式會社
長野市西和田四七〇

(黑柳製本)

發行所 株式會社 講談社
東京都文京區音羽二・二二・二

振替口座 電話 郵便番號
東京三九三〇 東京 (945) 一一一一(大代表) 一二二

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

Printed in Japan

目次

第一章

明治三十八年上田敏と漱石とケーベルの評判——鈴木三重吉の出現

三

第二章

漱石と三重吉——「中央公論」と瀧田樗蔭——正宗白鳥と河上肇

三

第三章

森田草平の出現——伊藤左千夫と漱石

三

第四章

抱月の歸朝と「早稻田文學」の再刊——「文章世界」の創刊——

四

「破戒」の完成——「破戒」の反響

第五章

秋水の入獄——秋水の渡米

五

第六章

大塚甲山と後藤宙外

九

第七章

伊良子清白の孔雀船——野口米次郎の歸朝

二六

第八章

福地櫻痴の死——谷活東の死

二七

第九章

漱石の「坊っちゃん」——三重吉の「千鳥」

一四〇

第十章

徳富蘆花の生活——徳富家の人々——蘆花の更生

一四一

第十一章

徳富健次郎と前田河廣一郎——伊香保の生活と出發——蘆花と

一四二

梁川——「文章世界」の蘆花評

第十二章……………二七

徳富健次郎の「聖地巡禮」——ヤスナヤ・ポリヤナ——トルス

トイと小西増太郎——トルストイの生活

参考文献……………三九

索引

装幀構成岡本芳雄

日本文壇史

——日露戦後の新文學

第一章

明治三十八年、上田敏と漱石とケーベルの評判——
鈴木三重吉の出現

1

明治三十八年（一九〇五年）の十月一日、東京市日本橋區馬喰町三丁目の今古堂書店から「文科大學學生生活」といふ小型百六十頁の本が発行された。著者はXY生といふ匿名である。その原稿はその年の夏頃讀賣新聞に連載されたものであつた。その書き出しの章から想像すると、瀬戸内海に面した地方の、あまり豊かでない家の出である筆者は、上京して第一高等學校に學び、そこから東京帝國大學の文科大学に進んだもの、又はさういふ假裝をした事情通であつた。その中で、當時の大學生から見た文壇や劇界については、次のやうに書かれてゐる。

「本郷座で藤澤（淺二郎—伊藤註）木下（吉之助—伊藤註）が不如歸を演じたれば、（明治三十八年五月—伊藤註）俄かに觀劇の流行を來たした。高田（實—伊藤註）の己が罪、金色夜叉、さては

今日の青年に詠向きの、ハムレットの舞臺にあらはるゝに至つて、高田、藤澤はかたじけなくも大學學生の翬ひいき員役者になつて、興行毎に場代半額の初日には五人十人誘ひ合はせて、所謂美に打たれに行く、昔劇通三木竹二先生の芝居道樂を冷笑した講堂で、劇評のかまびすしい程の變化、同窓の綾目は藤澤の貫一に感服して、失戀家の言語體度たいたどはあの通りだと、大に思ひ當る所のあるらしい。(略)芝居も評判の小説を演じたお蔭で學生を呼んだ程なもの、小説の同人間に愛讀されることはいふ迄もない。例の不如歸、金色夜叉の出た頃よりやうやく味を覺え始めたので、今日の作家では天外と鏡花が最も人氣を得てゐる。一體讀書社會の大部分を占むる女學生と其の理想の男子たる大學生を主人公にした小説なら、屹度歡迎されるとの噂で、我が同窓にも『魔風戀風』の東吾を氣取り、『新學士』(伊藤註、天外作)の狩村を以て任ずる者がある。鏡花の作は『湯島詣』以來で、篇中の人物は端役に至るまで當時の學生今の文學士をモデルに取つたとの事で評判であつたが、其の他の不思議な作まで頻しきりに愛誦される。寫實派の天外と其の反對の鏡花と相竝んで喜ばれるとは奇怪であるが、鏡花の方は散文的プロゼイックの頭腦で解せられなくとも、作家其自身を信仰し切つてゐるのだ。」

この筆者は、この前の年の十一月から出た文科大学學生小山内薫を中心とする「七人」といふ同人雑誌のことを相當よく知つてゐた。彼小山内薫を立花久米雄といふ假名で登場させ、その戀愛事件を次のやうに描いた。

「文學部の中でも、一粒撰りの七人男、老朽武者や烏合の衆を蹴ちらして、新日本の文壇に花々しく男を賣らんと意氣込凄じく、赤門内にずらりと勢揃ひして、てんでに大音聲の英佛獨の聯ね、いづれ劣らぬ名臺詞にてそぶるに末頼もしく思はるるが、中にも一際勝れし花形役者、差づめ市村羽左衛門の格で、七人座の人氣を一身に集め、脚本でも新體詩でも翻譯でも、何でもやつてのける腕達者は、名さへ薰ゆ^{かきり}かしい花橘に縁ある立花久米雄」である。

その立花は、妹の友達で番町の某女學校に學んだお淺といふ女性と歌留多會で一緒になり、心を奪はれる。ところが立花の友人に、大山といふ若い文士がある。大山は立花がそのお淺を愛してゐると知らずに、やつぱりお淺に近づく。大山は金持ちなので、女の心は大山の方に動くが、あいにく彼は召集されて、松山でロシア軍の捕虜係りを勤める。その間に、立花はお淺と親しくなつてしまふ。大山はそれを知つて立腹する。たまたま彼は公用で出張した時に、一日の暇を得て立花に逢はうと上京する。その日立花は、麻布龍土軒の文士の會合に出てゐた。

「其處に會合せる連中は何れも當代評判の詩人文士、戀を談じ、詩を語り、興正に^{まさ}關^{たけなは}なる折柄、氣焰家の大山が意外の來訪に、尙も話に花が咲いた」が、立花が大山に盃をさすと、大山は「貴様のやうな偽善者の盃は受けん」と怒鳴り立て、二人の間の不和は公然の事となる。

この本の出る三月前の明治三十八年七月、小山内薫は、「七人」の七月號を自分の詩「小野のわ

かれ」の特輯號とし、單行本のやうな獨立の一冊として刊行した。その時の署名は「なでしこ」であつた。彼はこの時、東京帝國大學系の新しい文士を代表するやうな存在になつてゐた。彼は小諸に島崎藤村を訪ねて以來、藤村の上京後も交際が續いてをり、また蒲原有明とも交際があつたので、有明を通じて、工學士で東京電鐵株式會社の技師をしながら文藝評論を書いてゐた臨川中澤重雄と知り合つた。またその中澤を通じて、この當時近事畫報社にゐた國木田獨歩とも交際があつた。もと柳田國男の家でしばらく續いてゐた文學談話會を、この人々が中心になつて、麻布の龍土軒といふフランス料理屋で定期的に開いてゐたので、小山内薫は自然にそのメンバーに加はつてゐた。小山内薫は高等學校時代に失戀し、そのあと内村鑑三に親近して、熱心なクリスチャンになつてゐたが、そのあとでもう一つの戀愛事件があり、その頃から彼は内村鑑三から遠ざかつた。文學への野望と青春の生活が彼を宗教から引きはなしたのである。「文科大學學生生活」の匿名筆者は、この當時の文科大學長坪井九馬三博士をはじめ、上田萬年、姊崎正治、三上參次、上田敏、井上哲次郎、建部遯吾、芳賀矢一等の教師たちに容赦のない批評を浴せた。この當時文科大學は、歴史系の坪井博士派と言語學系の上田萬年派に分れてゐて、教授、助教授、講師たちは、その何れかの側に組して對立してゐる、と筆者は名を擧げて指摘した。ただその中で、「無所屬の紳士は、夏目（金之助―伊藤註）、藤岡（作太郎又は勝二―伊藤註）、桑木（嚴翼―伊藤註）、大塚（保治―伊藤註）」

等にすぎない、と言ひ、また特に「赤門の聖人」といふ項を設けてケーベルの名を挙げ、「權勢名譽に血眼となれる教授先生」たちの中で珍しい存在として敬意を表した。「十年も講壇に立ちて毎年毎年變り行く學生の誰にも敬せられ愛せられて、嘗て惡評を下されしことなきケーベル博士の如きは、日本教授に此迄にも例のないこと、昔のリース、ハーンと共に良教師の三幅對にて（略）先生は無妻主義にて、音樂を最愛の妻とし、憂きも悲しみも一曲のピアノに忘れ、（略）そゞろに古の高僧善知識の偲ぶる次第にて、從僕の目には英雄なしといふ格言に背き、其の抱へ車夫まで、涙ながらに先生の憐れみ深きを語」る、と述べてゐた。

ラファエル・フォン・ケーベルは一八四八年生れであるから、このとき日本流の數へ年で言へば、五十八歳であつた。彼はドイツ系のロシア人で、モスクワ宮廷の樞密顧問官をしてゐたグスターヴの子として、ニシニ・ノヴゴロッドに生れた。家庭教師について、普通學科ををさめた後、モスクワの音樂院でニコライ・ルービンシュタインやチャイコフスキー等に學び、優れた成績で卒業した。その後、ドイツのイエナに行き、エルンスト・ヘッケルについて哲學を學び、その間にショーペンハウエルの思想に心を奪はれ、その弟子なるハルトマンの學說にも興味を抱いた。それが縁でハルトマンと親しくなり、カールスルーエに住んで音樂の教師をしてゐた。彼は秀才であつたが、内氣なためによい職につけなかつた。明治二十六年（一八九三年）、東京帝國大學は哲學の教

師を求める手紙をハルトマンに送った。ハルトマンはケーベルを推薦し、その年の六月、彼は着任した。彼は哲學概論、哲學史、キリスト教史、カント、ヘーゲルに關する特殊講義などを、その後十二年間續けた。その外、ギリシャ、ラテン語を教へ、またゲーテのファウストの特別講義をすることもあつた。彼は少し變則の英語で講義したが、それは日本人にはかへつて分りやすかつた。その人柄の美しさは、その講義の魅力と相まつて、帝大の學生たちに大きな影響を與へてゐた。彼は獨身で、身近の世話をするストラッサーといふ下男を連れて來てゐた。彼に近づいて影響を受けた大學生として、岩元禎、桑木嚴翼、姊崎正治、高山林次郎、岡田哲藏、波多野精一、吉田熊次、深田康算、西晉一郎、齋藤信策（高山林次郎の弟）等があつた。中でも深田康算はケーベルの宅に五年間寄寓してゐて、最も深い影響を受けてゐた。

ケーベルはそのほか上野の音樂學校でピアノを教へた。その弟子の中から幸田延子、橘糸重等が出て、後にその教授となつた。橘糸重は特にケーベルを敬愛し、しばしば彼を訪れた。

「文科大學學生生活」の筆者は、更に大塚保治と楠緒子夫人との、其頃では傳説になつてゐる古い變愛談を書き添へてユーモアを發揮した後、特に「漱石と柳村」といふ項を設けて、二年前にハーンのあとを襲つて同時に英文科の講師になつた二人についての噂や批評を書いた。柳村上田敏の文士としての活躍は、十年以上も前から「文學界」その他で知られてをり、明治三十四年には、「詩

聖ダンテ」「文藝論集」等の研究を發表し、文壇からも學界からも、その歐洲各國語にわたる語學力と文章の美しさで知られてゐた。この年も彼は、「明星」や「白百合」や「帝國文學」等に譯詩を發表してゐたが、この「文科大學學生生活」の出版されたと同じ十月に、これまでの譯詩の集大成である「海潮音」を、本郷書院から發行した。その集にまとめられた彼の譯詩の美しさ、またその韻律やスタイルの多彩なことは、前人未踏と言ふべきものであつた。明治二十五年に刊行された鷗外等の「水沫集」よりも、もつと新しい詩人の作品を多く含み、特にフランスのボードレエルをはじめ、象徵派のヴェルレーヌやレニエ、サマン等、イギリスのブラウニングやロセッティ兄妹の作品が目立つてゐた。この當時の日本詩壇の代表者であつた蒲原有明や薄田泣菫等は、明らかに上田柳村のこれ等の譯業の影響下にあつたばかりでなく、今後の日本の詩は、この一冊の譯詩集から導き出される運命を持つてゐた。たとへばヴェルレーヌの「落葉」を上田柳村は次のやうに譯してゐた。

秋の日の

ギオロンの

ためいきの

身にしみて